

Q 3 : 体験を生かす道徳の時間はどのように工夫すればよいか。

A : 学校における道徳教育は、学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳の時間をはじめとして、各教科・特別活動及び総合的な学習の時間のそれぞれの特質に応じて適切な指導を行うべきである。中でも、児童生徒の内面に根ざした道徳性の育成を図るためには、ボランティア活動や自然体験活動等の豊かな体験活動との関連が重要である。

(1) 道徳の時間に「体験」を生かす工夫

道徳の時間と「体験」のかかわり【三つの着眼点】

また、日常体験そのものを資料としたり、特にボランティア活動、自然体験活動などの体験活動を生かしたり、例えば、車椅子体験やアイマスク体験、実物や実際に触れる体験等を取り入れ活用することによって、道徳的価値の自覚を一層深めていくことができるような学習指導を工夫する。(『小(中)学校学習指導要領解説 道徳編』)

「体験」を生かす

体験活動を生かす

体験的な活動を取り入れる

子どもの「体験」全体を道徳の時間に生かす。(道徳の時間の授業づくり全体を通して)
体験活動と道徳の時間の各々の特色を保つ。(体験活動と道徳の時間の相乗効果を見通す)
体験的な活動を取り入れる効果を考えた上で位置付ける。

(体験活動そのものを道徳の時間で行わない)



なお、「ボランティア活動や自然体験活動などの体験活動を生かす」工夫については、道徳の時間においてボランティア活動や自然体験活動などの体験活動そのものを目的として行うことを意味しているのではない。**あくまでも道徳の時間のねらいを達成すること**、また、道徳教育のかなめとして道徳の時間の役割を果たすことを前提として、例えば学校行事等における体験などをどのように生かすと、道徳の時間の指導が児童生徒にとってより一層充実したものになるかということが重要なのである。

(『小(中)学校学習指導要領解説 道徳編』)

(2) 指導過程における体験等の取扱い

・「導入」

授業で扱う価値観にある程度気付かせたり、体験を想起させたりする。

・「展開」(特に、「価値の内面的自覚」と体験)

価値の内面的自覚の段階では、生徒の様々な体験を想起させ、自己を見つめさせるのが一般的である。しかし、生徒自身が自分の体験を絞って考えられない場合は、ある程度焦点化を図ったり、場合によっては限定した体験活動を教師が示したりするなど、実態に応じた段階的な指導が必要になる場合もある。

・「終末」

学校行事など児童生徒の諸活動で行われた活動の記録(感想文等)を活用し、道徳的実践意欲と態度を育成するための配慮をする。

ただし、行為や価値の押しつけにならないようにする。